

井上靖「漆胡樽」論 ——「西域物」の源泉——

劉東波

Abstract

Inoue Yasushi's literary works can be divided into Modern novels, Historical novels, Essays, and Travel notes, etc. "Western Regions Stories" belongs to his Historical novels. From the beginning of 1945, Inoue published the poem "Shikosan", and had produced a variety of excellent "Western Regions Stories". The background of the creation of Inoue in literary works, In addition to affecting the development of Dunhuang Studies, some of his own experiences also promoted the production of his "Western Regions Stories". In this paper, the focus is on the first "Western Regions Stories", through a survey of information to analyze the relationship between facts and fiction works. Moreover, by comparison with other periods' novels' analysis of "Shikosan"'s position in his literature is conducted, so that we can see that "Shikosan" is the starting point for his "Western Regions Stories". After this publication, numerous Western Regions Stories elements (eg: Overseas monk, Envoy dispatched to the Tang Dynasty) have appeared in his first work.

キーワード……詩 漢籍 対構造

一、はじめに

小説「漆胡樽」は、『新潮』昭和二五年四月号に発表され、その後短編集『雷雨』（昭和二五・一二、新潮社）や『井上靖歴史小説集』第三卷（昭和五六・八、岩波書店）などに収録された。

この作品は井上靖の最初の歴史小説だと評価されている¹⁾。さらに、この作品は井上の初の「西域物」でもある。しかし、厳密に言えば、初めの「西域物」は詩「漆胡樽」に遡ると考えられる。詩「漆胡樽——正倉院御物展を観て——」は、『文学雑誌』第一卷第三号（昭和二二・五）に掲載された。

小説「漆胡樽」で書いているように、「学者、教育家、芸術家、新聞報道関係者等の特殊な限られた人たちだけに設けられた特別観覧日」に井上が来場し、その実体験に取材して、井上は「漆胡樽」（詩と小説）を創作した。詩と小説を比べてみると、内容が大部重なっていることが分かる。特に、「隕石」という言葉は、重要なキーワードとして両方（詩と小説）に見られる。そこでまず、「隕石」をめぐる、詩から小説までの経緯を明らかにしたい。

山田哲久氏の研究によると、小説「漆胡樽」を執筆するにあたって、井上が羽田亨『西域文明史概論』（昭和六・四、弘文堂）や市村瓊次郎『東洋史統』（昭和一四・一二、富山房）などの史料を

参照した可能性が高い⁽²⁾。ところが、井上自身は、小説「玉碗記」に対して、小説『漆胡樽』の方は全くのフィクションであると述べている⁽³⁾。そこで本稿では、山田氏の先行研究を踏まえながら、「全くのフィクション」の意味合いについて考察する。小説「漆胡樽」に次のようにある⁽⁴⁾。

今まで帝室の秘宝として、一部の人を除いては、一般人の窺い知ることの出来なかつた正倉院御物の最初の公開は、敗戦直後の虚脱した人々の心に初めて一抹の光らしいものが射し込んだ感じで、国家の事業としても時宜を得た催しであった。(後略)

ここには、「最初の公開」と「敗戦直後」という表現が見られる。「最初の公開」は昭和二年の「正倉院特別展観」を指していると考えられる⁽⁵⁾。井上は詩「漆胡樽」の標題に付けた副題で、「御物展」と称しているが、展観目録⁽⁶⁾によれば、正式名称は「正倉院特別展観」となっている。井上の作品に、「御物展」という表記が見られる理由について、山田氏が既に考察を行っている⁽⁷⁾。

また、小説「漆胡樽」は、「張鷟」、「鄯善」、「遣唐使」などの言葉をめぐって、それぞれの物語を展開している。これらの言葉のいずれも、後に拡大され、小説の形で発表されることになる。それらの小説としては「異域の人」(『群像』昭和二八・七)、「楼

蘭」(『文芸春秋』昭和三三・七)、『天平の薨』(『中央公論』昭和三二・三・八)などが該当するだろう。本稿では、最後に小説「漆胡樽」と井上靖の他の「西域物」を比較し、井上靖の「西域物」における小説「漆胡樽」の位置づけについて考察を行う。

二、詩から小説へ

詩「漆胡樽」の発表は、「正倉院御物展」の翌年(昭和二年)である。井上靖は昭和一三年、召集を受けるも脚気のため除隊され、帰国した後、毎日新聞社の学芸部に復帰した。その仕事の関係で、井上はよく色々な展覧会を見に行った。『井上靖全集』別巻(平成一二・四、新潮社)の藤沢全編「井上靖年譜」によると、井上は昭和二年一月、「大阪本社文化部副部長」となり、四月、「第一回正倉院展を取材」した。しかし、諸資料⁽⁸⁾を調べてみると、年譜の記述は事実と異なる。井上が取材に行ったのは、「正倉院特別展観」(昭和二一・一〇・一九―二一・九)のほずである。

井上は新聞社で宗教欄・美術欄を担当したため、仏教、及び美術品に対し、相当な知識を持っている。井上が御物展を見に行き、異域から伝来した巨大な器物の漆胡樽と出会ったことは、偶然かもしれない。ところが、詩「漆胡樽」をはじめ「西域物」を創作したことは必然である。学生時代から西域趣味を持っていた井上は⁽⁹⁾、長年の勉強、及び職歴から身に着けた専門知識を通して、西域に対して深い理解と特別な感情を持っていたと思われる。そ

のため、御物展で漆胡樽に心惹かれた。

昭和三年三月、井上の詩集『北国』が東京創元社より出版され、詩「漆胡樽」が収録された。『北国』の「あとがき」で、井上は以下のように述べている⁽¹⁰⁾。

併し、どの作品も、どこかに詩と関連を持つてゐる文章だといふことは言へる。これらのそれぞれ独立して一つの題名を持つてゐる短い文章は、いろいろな関係の仕方ですと詩と関係を持つてゐるものであることに間違ひはない。

(中略) 自分の作品が詩といふより、詩を逃げないやうに閉ぢ込めてある小さい箱のやうな気がした。(後略)

この通り、井上の詩と小説は深い関連を持つてゐる。詩篇と、それと同題の小説との関連については、「漆胡樽」のほか、「猟銃」なども挙げられる。さらに、藤沢全氏は井上の詩が「文学の原点」と述べている⁽¹¹⁾。小説「漆胡樽」は詩「漆胡樽」から派生したものだと考えられる。井上は御物展で漆胡樽に魅了され、長年蓄えてきた西域への情熱を表現する形として、小説ではなく、まずは詩を用い、その創作を開始した。曾根博義氏は詩と小説との関連について以下のように述べている⁽¹²⁾。

正倉院御物展で見た西域伝来の異物の印象を書いた詩「漆胡樽」と、その詩から生まれた最初の歴史小説「漆胡樽」は、

その方法の秘密と、以後の歴史小説のモチーフを明らかにしている。

また、小笠原克氏も詩「漆胡樽」について、以下のように述べている⁽¹³⁾。

この短い散文詩にこめられた思いこそ、彼の西域取材作品に、あるときは史実に忠実な形で、あるときは空想の翼をかりて、あるときは抒情的ムードのなかに、共通して流れているムードであるだろう。

さらに、井上自身、自分の詩作は「小説の発想の母体」であり、「詩といふより、非常に便利調法な詩の保存器」、「詩の覚書」であるなどとも言っている⁽¹⁴⁾。以下、詩「漆胡樽」と小説「漆胡樽」の内容を引用する。

詩「漆胡樽」

星と月以外、何物をも持たぬ沙漠の夜、そこを大河のように移動してゆく民族の集団があつた。(中略)

巨大な夢を燃焼しつくした一個の隕石の面にただよう非情の翳りだけが、ふしぎに悲しみをすら喪失したこの国の人々のところに安らぎを与えるのであつた。

小説「漆胡樽」

「隕石ですよ、ありゃあ」

と、不機嫌に低い声で言った。

「隕石？」

と思わず私は訊き返した。

「隕石というほか仕方ないでしょう。大体、名なんてありません。漆胡樽というのは、無論後代の人が、恐らく日本人がいい加減につけた名ですよ。（中略）」

（前略）彼のいう一個の隕石の非情な面には、会場の埃がうつつらと、白く、置かれてあった。

私は勿論、戸田竜英の話を用いてはいない。私は日が経つにつれ、彼自身こそ一個の隕石であり、彼が私に物語った話こそ、なんらかの意味で彼が半生において為した大陸における彼の歷程の記録ではないかという考えが次第に濃くなつて来ている。

詩でも小説でも、漆胡樽を「隕石」にたとえて結んでいる。筆者は昭和元年から昭和二十一年までの、日本における隕石の墜落に関する記事を調べた¹⁵。その結果、該当する事件が見当たらなかった。では、作中の「隕石」は何を表しているのだろうか。おそらく、「隕石」は井上の青年時代の経歴とつながりがある。

「流星」

高等学校の学生のころ、日本海の砂丘の上で、ひとりマントに身を包み、仰向けに横にわたって、星の流れるのを見たことがある。十一月の凍った星座から、一条の青光をひらめかし忽焉とかき消えたその星の孤独な所行ほど、強く私の青春の魂をゆり動かしたものはなかった。私はいつまでも砂丘の上に横たわっていた。自分こそ、やがて落ちてくるその星を己が額に受けとめる、地上におけるただ一人の人間であることを、私はいささかも疑わなかった。

詩「流星」は、昭和二二年四月、京都市矢代書店より発行した詩誌『詩人』第三号に発表された詩である。末尾に「二二・一・五」とある。後に『北国』に収録された。この詩は、終戦直後にそれより数年前の高等学校青春時代を回顧して書いたものである。井上は「砂丘と私」で「私は四高の学生の頃、よくここに出掛けた。いつも海を望める砂丘の一つに腰をおろし、日本海の青黒い潮のうねりを眺めたものである。この日本海の砂丘は、私の青春に大きい関係を持つている。」と述べている¹⁶。

この詩は、詩「漆胡樽」とほぼ同時期に作られた作品である。「流星」で書かれた通り、井上の沙漠に対するイメージは、完全な想像で作られたものではなく、四高時代の砂丘から影響を受けたと見られる。さらに、「隕石」は井上の青春時代の実体験とつながりがある。そのため、小説「漆胡樽」の創作は、詩「漆胡樽」

だけではなく、詩「流星」から影響も受けたと考えられる。小説「漆胡樽」の発表の直接の契機は御物展である。その一方で、井上が学生時代から深い関心を持っていた西域に対する興味も、「西域物」の創作に影響を与えただろう。したがって、詩「漆胡樽」は、井上靖「西域物」の原点として、小説「漆胡樽」の「母体」とも言えるだろう。

三、井上靖が参照した「漢籍」

井上靖が、西域を小説の舞台として作品を創作する理由の一つは、自由に創作できることにある⁽¹⁷⁾。漆胡樽という器物自体が「勿論後代の人が、恐らく日本人がいい加減に付けた名」であり、「詳しく、何に使用されたものかさえも判らない」というように本作は多分に井上の「想像」の産物と言ってもよいだろう。一方、歴史小説の創作は、作者の「想像」だけで空白を埋めるのではなく大量の文献、資料の参照が必要である。

井上は小説「漆胡樽」を創作した際の状況について以下のように述べている。

「漆胡樽」は前から持っていた材料だったがいざ筆を取ると、調べ足りないことが次から次へ出て来て、連日半徹夜を繰返しながら到頭締切に間に合わなくなり、五十枚程の原稿を三回に渡す羽目になった⁽¹⁸⁾。

井上が述べている「調べ足りないこと」とは、歴史についての資料調査を指していると考えられる。井上靖の妻である井上ふみ氏は、小説「漆胡樽」を創作した際、徹夜で創作する井上靖の姿を回想して、「とにかく徹夜で書き上げたもののように。朝起きてきたら靖の歯がグラグラで、怖かった記憶があります。」と述べている⁽¹⁹⁾。この場面から、歴史小説を創作する際に、大量の資料から素材を選別することに苦労している作者の姿が見られる。

「漆胡樽」が発表された翌年、昭和二六年五月、一五年に亘る新聞記者生活に終止符を打ち、井上靖は作家として独立した。井上は「作家としても大切な時期にあつて、ロマンティックな仮構小説を書くべきか、史実に則した歴史小説を書くべきか、容易に判断がつかなかった。」と述べている⁽²⁰⁾。これは、井上が作家として独立する前、初の歴史小説を発表する時の心境であった。当時、既に「異域の人」の構想があつて、第一作をどちらにするかについて、非常に迷っているような様子が見られる⁽²¹⁾。結果を見ると、井上は「ロマンティックな仮構小説」(小説「漆胡樽」)のほうを選んだ。

しかし、「仮構小説」とはいえ、歴史小説として、基本の枠組みに、正確な歴史背景なども不可欠である。それが執筆の際の「調べ足りないこと」だったのである。「漆胡樽」における史実(史料)については、山田哲久氏が「戸田竜英」の語り」と「想定される「書物」を通して、論じている⁽²²⁾。以下、具体例を一つ挙げる。

「漆胡樽」原文

当時、西域地方にはいわゆる三十六国——三十六集團の
小部族が、ターリム盆地周辺に点々と散在するオアシス地帯
に、それぞれ小さい城廓を構え、農耕生活を営んでいた。ア
ーリヤ人種のイラン系に属する種族である。みな匈奴の西、
烏孫の南にあり、南北に大山（天山山脈と崑崙山脈）あり、
中央に河（ターリム河）あり、東西六千余里、南北千余里、
東は即ち漢に接し、阨するに玉門、陽関を以てし、西は即ち
限るに葱嶺（パミール高原）を以てすと、『漢書』西域伝
の伝うるように、常に北方遊牧民の掠奪と大自然の脅威のも
とに、彼等の生活は置かれてあった。

『漢書』（西域伝第六六）

西域以孝武時始通、本三十六国、其後稍分至五十余、皆
在匈奴之西、烏孫之南。南北有大山、中央有河、東西六千余
里、南北千余里。東則接漢、阨以玉門、陽関、西則限以葱嶺
。

以上の内容から、たしかに「漆胡樽」は『漢書』（西域伝）の内
容を参照して、この文章を構成している。しかし、『漢書』（西域
伝）だけでは、物語の内容をすべて網羅することはできない。「漆
胡樽」の創作において井上が参照した資料について、山田氏は、

『漢書』西域伝以外の「漢籍」を直接参照していない可能性があ
るのだ」と指摘している。以下、井上が参照した漢籍について、
山田説を検証したい。

「漆胡樽」原文

漢の武帝の命を奉じて、最初の公人として西域に使した張
騫が、あしかけ十三年に互る長い旅行を終わって、故国に
帰り着いたのは紀元前一二六年である。張騫は国を出る時
百余人の同行者を伴って出発したが、帰る時は僅か一人を
従うのみであった。

『西域文明史概論』（二）東西の交通と西域

漢の武帝の命を奉じて西域に使した張騫が西暦紀元前一
二六年に、十三年間にかけての長い旅行を了って帰って来た
ので、こゝに始めて支那では西域の事情を知ることが出来る
ようになったといふのは東西交通の発端として、支那の歴史
に記されて居る有名な事件である。

『東洋史統』（第三章 匈奴及び西域の経略）

張騫の出発してより帰還するまでに十三年もかかったの
で、最初の同行者百余人の中、張騫と共に還り来つたもの
は唯一人のみであった。

『漢書』（張騫伝第三二）
初騫行時 百余人、去十三歳、唯二人得還。

以上のように、小説「漆胡樽」の内容と『漢書』の記述に異同が見られる。山田氏によると、この部分の典拠は、『西域文明史概論』及び『東洋史統』である可能性が高い。内容の類似性以外にも、この二冊の書物が井上の蔵書にあることも山田氏によって指摘されている。では、井上は『漢書』（西域伝）のほか、『漢書』のほかの部分、或いはほかの漢籍を参照する可能性について論じたい。

次に、「漆胡樽」の他の部分を取り上げ、漢籍と比較してみよう。

「漆胡樽」原文

漢の大將軍衛青、驃騎將軍霍去病の兩兵团が、国境から隔たること二千余里の漠北の地で、匈奴の主力と決戦を敢行し、これに徹底的な打撃を与えたのは元狩四年のことであった。（中略）この会戦では匈奴軍も亦必勝を期して、单于是輜重を遠ざけ、自ら精兵を率いて、漠北の地に布陣した。激戦は一日続けられた。日暮れて幾許もなくして、沙漠の新戦場には大旋風が巻き起こった。（中略）单于是戦いの不利なることを知ると、壮騎数百と共に西北に遁走してしまった。（後略）

『漢書』（匈奴伝第六四）

令大將軍青、票騎將軍去病中分軍、（中略）单于聞之、遠甚輜重、以精兵待於幕北。与漢大將軍接戰一日、会暮、大風起、漢兵縦左右翼圍单于。单于自度戰不能与漢兵、遂独与壮騎数百潰漢圍西北遁走。

以上のように、「漆胡樽」と『漢書』（匈奴伝）の内容は、極めて似ている。この典拠は『漢書』（匈奴伝）であると云えるだろう。また、同じようなことが次の箇所にも言える。

「漆胡樽」原文

後漢桓帝の元嘉年間、涼州の諸羌が一時に叛し、四川、湖北、陝西、山西、直隸の各地方が惨害を蒙った。（中略）村には男が少なかった。都では、甲卒多く徴発され、麦をかるのは婦女子のみという歌謡が流行していた。

『後漢書』（五行一 謡）

桓帝之初、天下童謡曰、「小麦青青大麦枯、誰当穫者婦与姑。丈人何在西擊胡、吏買馬、君具車、請為諸君鼓嚨胡。」案元嘉中、涼州諸羌一時俱反、南入蜀、漢、東抄三輔、延及并、冀、大為民害。命將出眾、每戰常負、中国益發甲卒、麦多委棄、但有婦女穫刈之也。吏買馬、君具車者、言調發重及有秩者也。請為諸君鼓嚨胡者、不敢公言、私咽語。

さらに、沙漠のイメージの形成に関して、井上は「空に一飛鳥なく地に一走獣なし」（法顕）とか、「人骨、獣骨の類を以って、行路の標識となすのみ」（法顕）とか、そういった往古の紀行類の文章で、私はタクラマカン沙漠のイメージを作り上げていた」と述べている²³。「漆胡樽」では、「上に飛鳥なく下に走獣なしと言われる沙の海」という描写が見られる。

既に「漆胡樽」の創作段階で、法顕の旅を記録している『高僧法顕伝』における「上無飛鳥下無走獣。四顧茫茫莫測所之。唯視日以准東西。望人骨以標行路耳²⁴。」を参照したと推測できるだろう。

上述の比較を見ると、本文における歴史的設定について、山田氏が指摘しているように、井上の蔵書にある『西域文明史概論』や『東洋史統』を参照した可能性が高い。しかし、それだけでなく、それと同時に、漢籍の『史記』、『漢書』、『後漢書』、『高僧法顕伝』なども参照している可能性が高いと考えられる。

四、小説「漆胡樽」における虚構

1、井上靖の造語

小説「漆胡樽」は三章構成であり、「一」と「三」は新聞記者の「私」の写実的な記述である。「二」は戸田竜英が語る、漆胡樽が二千年前の西域から、日本へ伝来する物語である。

井上は膨大な歴史資料を参照して、作品を創作したが、歴史資

料の中にも、空白がいたるところに存在する。井上は漆胡樽という器物を利用し、その二千年間の流転を、戸田竜英の語る話として、フィクションで完成した。「二」の物語は、以下の四つの短いエピソードから構成される。

A 鄯善国の祭壇にある葡萄酒が入っている漆胡樽と、若者が匈奴に攻撃され、漆胡樽を失うこと。（紀元前一二六年）

B 匈奴の酋族の捕虜陳が、族長の妻女を連れ、水が入っている漆胡樽を持って、逃亡すること。（元狩四年、紀元前一一九年）

C 小吏の張某が、農家の老婆から胡国のもの・漆胡樽を盗むこと。（元嘉二年、紀元一五二年）

D 聖武帝の遣唐使の随員、大聖寺某なる者が、自分の身代わりとして、漆胡樽を故国に送ること。（天平六年、紀元七三四年）

Aの物語に、ある言葉が頻繁に出てくる。それは、「河竜^{かりゅう}」である。「河竜」に関して、日中両国の辞書、『日本国語大辞典』第二版（平成一五・一、小学館）や『現代漢語大詞典』（平成二二・

一、上海辞書出版社)を調べてみた²⁵。「河竜」は『漢語大詞典』(平成二・一二、上海辞書出版社)で、「伝説上の黄河龍馬」と解されてる。しかし、この解釈と「漆胡樽」における「河竜」の意味と異なる場所が見られる。したがって、「漆胡樽」における「河竜」は井上靖の造語ではないかと考えられる。

では、「河竜」とは本作でいかなるものだろうか。まず、原文の内容を取り上げる。

彼が、昨夜祭壇において、漆胡樽の中の酒が滲み出たのは、河竜がそれを要求したのではないかと思いついたのは、既にその日の行程の半ばに達せんとした頃であった。彼はこの数年間続いた大旱魃を、常々、河竜の怒りによるものと固く信じていた。彼は、年長の者の意見を訊いてみた。いずれも、その酒を河竜に献ずべきであると言った。彼は単身城邑に引き返し、河床の一角にその酒を投ぜんことを決意したのである。(後略)

「大旱魃」になったのは、「河竜」の怒りであると彼(若者)は考える。竜は想像上の動物である。水に住み、時に空中を飛行し、雲雨を支配する力を持ち、水の神とされている。「河竜」が住む「ロブ湖」とは、ロプノールである。これは、タクラマカン沙漠にかつて存在した塩湖で、「さまよえる湖」として知られている²⁶。「ロブ湖」は歴史上、何度も気候の変化によって河道が移動

した。それに伴って、楼蘭(後に鄯善と改称)という西域の国も移転した。本文の「河竜」は、「河」といいながら、実は湖にいると分かる。では、小説「漆胡樽」で、なぜ「湖竜」ではなく、「河竜」とされたのか。

小説で「祭壇」を置くのは、「河竜」を祭るためである。古代の中国では、旱魃が起こった時、水の神を祭る祭礼が行われる。「祭壇」に供える酒も欠かせないものである。水の神と言えば、河神、河伯などを指す場合が多い。特に、河伯は河の神だと理解され、祭祀される文化がある²⁷。河伯の本体について、森安太郎氏は「魚身蛇首」、「細長い蛇魚」と述べている。この点から、河伯と竜のつながりが見られる²⁸。さらに、井上が愛読した『西遊記』には、河に住む「涇河竜王」という人物がいる。「涇河竜王」の怒りに関する描写も見られる。そのため、井上靖の造語「河竜」は、河伯と竜を組み合わせて作られたのではないだろうか。

では、もう一つの造語を取り上げる。小説「漆胡樽」では、「月光盛んなる時必ず美玉を得るといふ名高い于闐国の玉河」という記述がある。『敦煌』(『群像』昭和三四・一―五)には、「月光玉」という言葉が出てくる。それは回鶻王族の女が持っている首飾りの玉である。したがって、『敦煌』の「月光玉」という造語の由来も「漆胡樽」の一文であると推測できる。この点に、井上が述べた「小説発想の母体」や「覚書」などの意味が窺える。

2、物語における対構造

小説「漆胡樽」が発表された後、井上の他の「西域物」が次々と登場した。それらの「西域物」と「漆胡樽」は深いつながりがある。特に、物語における対構造が多く、「西域物」で登場することに注目したい。対構造は井上の「西域物」で重要な役割を果たしている。

井上靖の「西域物」における対構造は、対の器物と対の人物二種類に分類できる。それぞれが登場する作品は以下の通りである。（成立順）

〈器物〉

漆胡樽

「漆胡樽」

白瑠璃碗

「玉碗記」

甕

『天平の甕』

黄色い絹布の被い物

「楼蘭」

月光玉の首飾り

『敦煌』

〈人物〉

私と戸田竜英

「漆胡樽」

私と桑島辰也

「玉碗記」

安閑天皇と春日皇女

「玉碗記」

木津元介と多緒

「玉碗記」

行賀と仙雲

「僧行賀の涙」〔『中央公論』

昭和二九・三）

普照と栄叡

『天平の甕』

趙行徳と朱王礼

『敦煌』

索勤とアシャ族の女

「洪水」〔『声』第四号、昭和

三四・七）

陸沈康とカレ族の女

（後、二匹の狼に変身）

「狼災記」〔『新潮』昭和三

六・八）

対構造が「西域物」で始めて使われたのは、詩「漆胡樽」である。さらに、小説「漆胡樽」の段階で対の人物も登場した。「漆胡樽」はその後の「西域物」に大きな影響を与えたと見られる。

漆胡樽も月光玉も、井上の作品で西域の物だと設定されている。このような西域の器物の流転を語っている作品と言えば、「玉碗記」が挙げられる。「玉碗記」は小説「漆胡樽」と「よく似ている」作品だと言われている²⁹。この二つの作品について、井上は以下のように述べている³⁰。

私は、漆胡樽という作品では、全く一つのロマンとして、漆胡樽が日本へ来るまでの経過を一篇の物語として書いたが、玉碗の場合、それだけの度胸はなかった。玉碗が発見されて、対照調査が行はれるまでの経緯を殆ど事実に基づいて書いて、二個の往古の器物が長年月を経て相会ふ運命を、現代

の一組の男女の運命とからませて書いた。

井上は昭和二一年の御物展で、漆胡樽だけでなく玉碗とも出会った。漆胡樽は第五室にあつたが、第七室に「白瑠璃碗」という玉碗も展示されていた。昭和二五年八月二日、毎日新聞大阪本社で開催された、河内郷土文化研究会主催の「西琳寺講演会」の会場に一つの器物が持ち込まれた。考古学者の石田茂作氏がその場で鑑定して、「こんなによく似たものがあるのはどういふ事であらう。」と述べた⁽³¹⁾。昭和二五年八月一五日、『毎日新聞』(夕刊)には、「西琳寺の玉碗」発見される 明治初年来行方不明中の国宝級」という記事が掲載された。その後、井上が玉碗に関する実地調査を行いながら取材した。

山田哲久氏は「井上靖「玉碗記」論」で、玉碗の発見から小説化までの経緯を考察し、「玉碗記」における「考古学の引用」を明らかにした⁽³²⁾。井上自身も、「安閑天皇の玉碗」で「発見された直後ではあつたし、(略)あまり自由な想像を駆使することにはできず、作品としては自分ながら不出来なもの」と述べている⁽³³⁾。おそらく、井上は「玉碗記」を創作した際、大量の資料に縛られ、想像を「駆使」出来なかつたから失敗作だと言っているのではない。白瑠璃碗は、西域から中国へ渡り、中国から朝鮮を経て日本皇室の正倉院に辿り着いた国宝である。「玉碗記」で、その流転の経緯と、白瑠璃碗のロマンチックな再会を語っている。「玉碗記」も「西域物の流転を語る」という点では、「漆胡樽」と共通してい

る。しかし、作者の想像を「自由に駆使」したか否かという点が、二作品の一番の相違点だと考えられる。では、「漆胡樽」における対構造(人物)について分析する。

小説「漆胡樽」における「私」と戸田竜英は架空の登場人物である。この対の人物は対の器物(漆胡樽)から生まれた。「私」の身分は、「新聞記者」と設定され、昭和二一年に御物展に取材に行った毎日新聞社に勤めていた井上の経歴と一致している。そのため、「私」のモデルは井上自身であると見られる。

以下で、戸田竜英という人物は、井上靖の分身ではないかを検証する。以下の四つの方面から戸田竜英は井上の分身だと推測できらるだろう。

一つ目は、戸田竜英の外貌は井上靖と似ている。「若い小柄な男」、「まだ四十になるかならぬか」、「紺緋の着物を着ていた」に設定されている。井上自身が、小柄で、昭和二一年の時点で三九歳であった。紺色の着物を着ている井上の姿も多くの写真で見られる。したがって、戸田の体型も年齢も井上と一致していると分かる。

二つ目は、戸田は漆胡樽に関する四つの物語を語って、漆胡樽に非常に詳しい専門家と設定されている。小説「漆胡樽」の創作について、井上は「あれは美術品などじゃない、ラクダの背に積む生活の器具なんだが、名前も、どうやって日本へ来たかもわからない。だから私は想像で小説に書いたわけです。」と語っている⁽³⁴⁾。当時、漆胡樽について詳しい専門家はいないようで、小説家

の想像で物語を構築するしかない。現実には物語を創作したのは井上であるが、小説では作者の分身として戸田という考古学の専門家が登場した。さらに、「私」は戸田を訪ねた時の描写に、「漢籍や仏典の乱雑に積み上げられた」「書齋」とある。この内容から、『毎日新聞』の宗教欄を担当していた井上が小説を創作した時、参照した「漢籍」のことを連想させる。前述した通り、井上は「漆胡樽」を創作した時、大量の資料を調べ、研究した。井上の苦勞していた様子を戸田に託しているのではないか。つまり、漆胡樽に詳しい戸田という人物に、井上の自己投影が見られる。

三つ目は、戸田と「私」が漆胡樽と出会って、心が惹かれた経緯が極めて似ている点である。「私」は御物展でまず、「新聞記者らしい荒っぽさで廻って仕舞」、その後「再び、第五室に逆戻り」して漆胡樽を丁寧に見直した。「私はこの異様な形状の巨大な器物になんとなく心惹かれていた。」とある。戸田が漆胡樽に心惹かれた場面は、「私」の経緯と似ている。さらに、戸田の視点を通してより詳しく、漆胡樽を鑑賞する場面を描いている。戸田も、一回目は「御物の陳列」を終え、「説明の名札」を付け終わった時点で、漆胡樽に留意していなかった。二回目は、館員と共に部屋の鍵を掛けた時、漆胡樽に心惹かれた。しかも、井上は戸田の鑑賞過程を長文で、かなり詳しく描いている。この詳細な鑑賞過程を、光の変化を利用して綴っている。もしこの詳細な鑑賞過程を、自分で書かれたら、不自然だと思われるだろう。そこで、井上は戸田という自分の分身を作り、美術や考古学に詳しい専門家の視点

を通して、漆胡樽の姿を詳しく描写しているのである。

四つ目は、本稿の（二）で論じた「隕石」と関わりがある。以下、改めて「隕石」について分析する。

「流星」

（前略）私はいつまでも砂丘の上に横たわっていた。自分こそ、やがて落ちてくるその星を己が額に受けとめる（後略）

小説「漆胡樽」

（前略）私は日が経つにつれ、彼自身こそ一個の隕石であり、彼が私に物語った話こそ、なんらかの意味で彼が半生において為した大陸における彼の歷程の記録ではないか（後略）

「流星」で、井上は流星を「己が額に受け止める」と語った。井上がこの流星を見たのは、金沢で暮らした四高時代であった。井上は自分の西域への夢について、西域に「高等学校の学生時代から深い関心と興味を持っていた」と述べている³⁵。四高時代から、井上は多くの西域に関する本を読んだそうである。しかし、井上にとって、西域は「足を踏み入れることのできぬ聖地」と述べている³⁶。そこで、金沢の砂丘の上に横になった井上は流星の力を借りて、西域という未知の世界へ入りたかったのではないだろうか。井上は自分が流星のように、空間の制限を突破できるような存在になりたかったのだろう。また、不思議な物語を語っ

た戸田の存在も、「隕石」のように未知の世界から飛んで来た人物という印象が強い。この二つの文章を並べてみると、「隕石」と言われている戸田は井上の分身であると窺える。

以上のように、小説「漆胡樽」で戸田と「私」二人の人物が登場しているが、漆胡樽に関する物語を引き出すという、同じ役目を果たしている。不思議な物語を展開させるため、井上は自分を二つの分身（記者・学者）に投影し、対の人物を作中に併存している。

五、「漆胡樽」と他の「西域物」

小説「漆胡樽」の「二」で戸田竜英が語る四つのエピソードA（Dについて、検討を続ける。それぞれの冒頭部分では、年代、及び歴史的・社会的背景が具体的に記されている。しかし、その限定された時代の西域では、具体的な出来事に関する記録はほとんど残されていない。井上はそれぞれの時代の特徴（漢と匈奴との戦い、単于の敗走、後漢の荒廃乱離等）を巧みに利用し、「フィクション」の物語を創作した。四つのエピソードは、独立していると見られるが、全部をあわせると、統一性が見られる。二千年に亘る漆胡樽の流転を語っている。これら四つのエピソードは後に「西域物」の一つ一つの独立した作品に発展してゆく。

1、エピソードA

まず、エピソードAを検討する。「漆胡樽」では鄯善（楼蘭）の移転の一場面のみが描かれているが、後の「楼蘭」では、全面的に楼蘭の盛衰や、漢と匈奴の戦いなどが詳しく語られている。「上に飛鳥なく下に走獣なし」のような「漆胡樽」で使われた表現は、「楼蘭」や「洪水」にも見られる。また、「河竜」が直接に「楼蘭」で登場し、間接に「河神」として「洪水」でも登場する。「楼蘭」では、「河竜」が「この種族が自分たちの種族神として崇めている神の名であった。」と明確に書かれている。「洪水」では河神を祭祀する経緯を詳しく語っている。また、先述した『敦煌』における「月光玉」の原型は、この部分に該当すると考えられる。

2、エピソードB

次に、エピソードBを検討する。Bに関しては、「捕虜」、「故国を思慕するの情」、「異民族の女との恋愛」といった表現に注目したい。「捕虜」と言えば、『敦煌』の登場人物の趙行徳と朱王札を連想させる。「漆胡樽」の陳は匈奴の捕虜であり、趙行徳は西夏の漢人部隊の捕虜、朱王札は西夏軍の捕虜であった。古代の西域には、「三十六国、五十五」³⁷があり、日々の戦いの中で、捕虜にしたり、捕虜にされたりすることは珍しいことではない。井上は「捕虜」という設定を利用し、登場人物それぞれの人生を描いた。

「故国を思慕するの情」は、井上の「西域物」で多くの人物が持っている共通の感情だと思われる。例えば、中国から西域に入

った人物、張鷟や班超（「異域の人」）、趙行徳、朱王礼（『敦煌』、陸沈康（「狼災記」）、中行説（「宦者中行説」、『文芸』昭和三八・八）などが挙げられる。それに対して、日本から中国に入った留学僧の中で、同じような感情を持っている人物もいる。行賀（「僧行賀の涙」）や普照、栄叡（『天平の甍』）などが挙げられる。エピソードBの陳某は、「胡地に留まること既に十年」の後に逃亡し、沙漠を渡って瀕死の状態で漢軍に救われた。「苦しいか」と問われると、陳は「匈奴の言葉」で答えた。これは、「異域の人」の班超が三〇年の異域生活を送った後、「胡人！」と呼ばれる場面と似ている。また、「僧行賀の涙」における行賀は、「在唐期間三十一年」であり、日本に戻った後、日本の言葉を口にするのが「ひどく不自由」となり、東大寺の僧明一の試問に答えられなかった。この場面の原型も、小説「漆胡樽」にあると言えるだろう。

陳某は逃亡する時、「族長の妻女」を連れて行った。最初は「道案内」として、女を利用しようと思ったが、女が死んだ時、「偽りでない真実の愛情の如きものを感じた」。このような、漢族の登場人物と異民族の女の間に「愛情」を生じることが、他作品にも見られる。趙行徳と回鶻族の王女との恋愛話（『敦煌』）や、陸沈康とカレ族の女との愛情（「狼災記」）などが描かれている。「漆胡樽」の段階では、「曾族の女」の個性は目立たないが、その後の他作品で、それぞれの個性を持つ西域の女が創作されることになる。

3、エピソードC

そして、エピソードCでは、「盗賊」の張某という人物が作り出された。張某は、小吏の身分でありながら、「二、三年前から古物を漁ってこれを高く売りつける」といった商売もやっている。さらに、老婆の家から漆胡樽を盗む。『敦煌』では、尉遲光という「強盗」のような人物が登場する。表面上は、貿易商人の身分を持つているが、「沙漠の強盗」のようなことをしている。張某と尉遲光の間は、偷盗という役割でつながっている。また、「永泰公主の頸飾り」（『オール読物』昭和三九・一一）には、盗掘者の陳某が登場する。この作品は、発掘調査を契機として創作した作品であり、「漆胡樽」、「玉碗記」と極めて似ている設定の作品だと思われる。

4、エピソードD

最後に、エピソードDを分析する。AからCまでは、「西域と西域」、「西域と中国」を背景にして物語が展開している。Dでは、「中国と日本」を背景にしている。Dの物語において、名前の明らかでない「大聖寺某なる者」が登場する。彼は遣唐使と一緒に、唐土へ渡来した。一度、海の遭難事故を経験した後、母国の日本に帰る心は「全く喪われていた」という。留学僧を描く小説には、「僧行賀の涙」や『天平の甍』がある。特に、『天平の甍』では、五人の留学僧（普照、栄叡、玄朗、戎融、業行）が描かれている。その中でも玄朗は、一回目の渡航が失敗した後、帰国せず唐土に残ることになった。その後、僧籍から脱し、唐女と結婚する。玄

朗の経歴に似て、「漆胡樽」における「大聖寺某なる者」は、「子供を持ち、唐衣を着る」と描かれている。そのため、玄朗のモデル（あるいは初期型）は「大聖寺某なる者」に該当すると考えられる。

六、おわりに

本稿では、小説「漆胡樽」を中心に考察を行った。井上が西域に興味を持った青年時代から、小説「漆胡樽」を発表するまで、およそ二五年を経過している。この作品は、井上が作家として独立する証で、「西域物」のほぼ全要素がこの一篇に揃っている。

小説「漆胡樽」は、漆胡樽が東トルキスタンのある民族の駱駝の背から匈奴の手に渡り、それが中国にもたらされ、さらに日本の遣唐使の一行の手に移り、正倉院の宝庫に収まるまでの経緯を、「全くのフィクション」で綴ったものである。「漆胡樽」は、西域の器物を糸にして、諸々の「西域物」に繋がっている。「漆胡樽」は他の「西域物」の「母体」であり、草稿（初期型）ともなっている。

小説「漆胡樽」は詩から派生し、小説「漆胡樽」からは、また多くの「西域物」が派生した。小説「漆胡樽」は、井上靖の「西域物」の源泉と言ってもよいだろう。

〈注〉

- (1) 曾根博義「井上靖における『歴史』」『現代文研究シリーズ 16 井上靖』昭和六一・五、尚学図書
- (2) 山田哲久「井上靖『漆胡樽』論——『歴史』への態度——」『同志社国文学』第七〇号、平成二一・三
- (3) 井上靖「二十四の小石」『名作自選 日本現代文学館 猟銃 他二十三篇』昭和四七・一二、ほるぷ出版
- (4) 本文の引用は、総て『井上靖全集』第二巻（平成七・一〇、新潮社）による。引用部分の傍線は、筆者による。なお、引用部分の表記は、新体字で統一し、仮名遣いはそのままにした。
- (5) 和田軍一『正倉院案内』（平成八・二、吉川弘文館）、「宝へ接近」の部分参照した。
- (6) 『正倉院特別展観目録』（昭和二一・一〇、帝室博物館）
- (7) (2)に同じ。山田氏の論によれば、昭和二二年の正倉院展では、『朝日新聞』の記事は、「正倉院特別展観」で統一されている。一方、『毎日新聞』のほうは、「正倉院御物展」または「正倉院御物展観」の表記で統一されている。毎日新聞社に勤務していた井上靖が、「正倉院御物展」という表記を選択した理由には、このような背景があると述べている。
- (8) (5)と(6)のほか、『奈良国立博物館百年の歩み』（平成七・四、奈良国立博物館）、『県政だより 奈良—世界に光る奈良県づくり』（平成二三・三、奈良県広報課）などの資料によると、「正倉院特別展観」の会期は、昭和二一年一〇月一九日から一一月九日までの二一日間であり、一九日は特別招待日、二〇日は進駐軍招待日である。
- (9) 井上靖「小説『敦煌』ノート」『シルクロード 絲綢之路2 敦煌—砂漠の大画廊』昭和五五・六、日本放送出版協会）で、井上は「私は学生時代から西域関係のものを読むのが好き」と述べている。
- (10) 井上靖「あとがき」『北国』昭和三三・三、東京創元社）
- (11) 藤沢全『詩人 井上靖』（平成二二・九、角川学芸出版）
- (12) (1)に同じ。
- (13) 小笠原克「井上靖の西域取材」『国文学』昭和三七・六）
- (14) (10)に同じ。
- (15) 朝日新聞記事データベース（開蔵 II ビジュアル・フォーライブラリ）及び新潟大学図書館所蔵の『朝日新聞』縮刷版を用いた。

- (16) 井上靖「砂丘と私」『砂丘の幻想』昭和四五・一一、淡交社
- (17) 井上靖、篠田一士、辻邦生『わが文学軌跡』(昭和五二・四、中央公論社)一六〇―一六一ページで、「西域を舞台にしますと、ほとんど古い記述は残されていない。ですから、自由に書けますね。」と井上靖は述べている。
- (18) 井上靖「新潮と私」『新潮』昭和三〇・四
- (19) 井上ふみ「思い出すままに」(『井上靖 詩と物語の饗宴』平成八・一二、至文堂)
- (20) (3)に同じ。
- (21) (3)に同じ。井上は『漆胡樽』を書く時、既に『異域の人』の構想もできており、その執れを、この種の作品の第一作として発表すべきかなかなか決らなかった。」と述べている。
- (22) (2)に同じ。
- (23) (9)に同じ。
- (24) 『高僧法顕伝』(昭和四・一、奈良美術研究会)
- (25) 『日本国語大辞典』第二版と『現代漢語大詞典』は、それぞれの国で最大規模の国語辞典である。
- (26) ヘーデン／福田宏年訳『さまよえる湖』(上・下) (平成二・六、岩波文庫)を参照した。
- (27) 鄭文杰『九歌・河伯』源於楚人祀河新考(『四川師範大学学报』第三四卷第六期、平成一九・一一)と、李進寧「屈原〈河伯〉祀主探源」(『四川文理学院学报』第二六卷第一期、平成二八・一)の考察によると、楚の時代から河伯を祭祀する文化があったという。
- (28) 森安太郎「河伯馮夷」(『京都女子大学人文論叢』第一〇号、昭和三九・一一)
- (29) (1)に同じ。
- (30) 井上靖「安閑天皇の玉腕」(『芸術新潮』昭和二八・一)
- (31) 石田茂作「西琳寺白瑠璃椀」(『考古学雑誌』第三六卷第四号、昭和二五・一一)
- (32) 山田哲久「井上靖「玉碗記」論——考古学の引用——」(『同志社国文学』第六七号、平成一九・一二)
- (33) (30)に同じ。
- (34) 山崎健司「小説の四季」59「漆胡樽 井上靖」(『読売新聞』夕刊、昭和四九・三・一三)で、井上靖が語ったものを引用した。
- (35) 井上靖「限りなき西域への夢」(『週刊読書人』昭和五二・一〇)
- (36) 井上靖「行けぬ聖地ゆえの情熱」(『朝日新聞』昭和五四・三・四)
- (37) 李延寿(唐)『北史』「列伝第八五 西域」で、「漢氏、初めて西域を開き、三十六国あり。其の後、五十五の王に分立した。」と記されている。
- 主指導教員(堀竜一教授)、副指導教員(鈴木恵教授・角谷聡准教授)